

短期留学生の大学寮における

ソーシャル・ネットワーク形成

—教育資源としての寮の活用—

International Students' Social Network

Development in Dormitories:

Dormitories as Educational Resources

東洋大学国際教育センター 山川 史

YAMAKAWA Fumi

(Center for Global Education and Exchange, Toyo University)

キーワード：ソーシャル・ネットワーク、大学寮、短期留学生、日本語教育、外国人留学生宿舎

1. はじめに

近年、グローバル化に伴い短期留学プログラムが増加し、短期留学生の受け入れが急速に広まっている。また、2014年には、「スーパーグローバル大学創成支援事業」がスタートし、各大学が国際化を加速させる中、留学生と日本人学生と一緒に住む大学寮への関心が高まっている（望月，2013）。「学生生活に関する施設」の調査（独立行政法人日本学生支援機構，2014）によると、平成23年度から平成25年度までに新設置・増設した施設の中で最も高い割合を示しているのは、大学寮であるという。その具体的な新設置・増設理由には、「学生への経済的問題の配慮」や「快適な生活環境の提供」といった物理的な理由だけでなく、「共同生活を通じた規律意識の醸成」や「留学生との共同生活を通じた異文化理解・外国語能力の向上」といった教育的な理由も挙げられている。このことから、大学寮が単に寝泊まりをする「生活の場」だけではなく、「教育の場」としても認識されるようになっていくことがわかる。つまり、大学は、大学寮を授業とは異なる力を育成できる場として活用できるという期待を持っていると言えよう。そのような大学寮は、主に日本人学生をグローバル人材に育成する場として議論されてきた。そのため、留学生はその「手段」として位置付けられている。

しかし、留学生にとっても日本人学生と一緒に住む寮は、日本語の習得や文化理解、友人関係など

のソーシャル・ネットワーク形成といった面において利点があると考えられる。特に、日本人学生の友人を持つことは、学習面や精神面において様々なサポートを得ることができるため、留学生にとっては充実した留学生活を送るうえで重要であることが指摘されている (Hendrickson, Rosen & Anue, 2011; 高井, 1994)。また、自分とは異なる文化を持つルームメイトと一緒に生活を送ることは、その文化に対する偏見の低減や文化学習につながると言う (Kudo, 2010; Vande Berg, Connor-Linton & Paige, 2009; van Laar, Levin, Sindair & Sedanius, 2005)。さらに、短期留学生は、日本人と一緒に住む大学寮に対して、異文化理解や日本語力向上といった意識を持っていることも明らかになっている (正宗, 2015)。これらの研究から、留学生と日本人学生が生活を共にする大学寮は、日本人学生側だけではなく留学生側にとっても有益であり、双方にとって重要な「教育の場」となり得ると言える。特に、日本語教育分野においては、短期留学生に対し、限られた時間の中でいかに充実した日本語教育を提供できるかがより一層重要な課題となっている。そのため、大学寮において短期留学生をどのように取り込んでいき、教育資源としてどのように活用できるのかという議論が必要である。

そこで、本稿では、短期留学生に焦点を当て、ソーシャル・ネットワーク形成という切り口から大学寮の活用について考察する。そのために、まず、なぜソーシャル・ネットワークに注目するのか、ソーシャル・ネットワークと学びの関係について説明する。次に、2つの「相反する」大学寮を取り上げ、それぞれの寮内における短期留学生のソーシャル・ネットワーク形成の特徴について論じる。最後に、大学寮を教育的資源として、より効果的に活用するための提言を日本語教育の観点から行う。

2. ソーシャル・ネットワークと学び

ソーシャル・ネットワークとは、社会におけるつながりを表す言葉である (Christakis & Fowler, 2009)。そのつながりには国レベルや組織レベルなど様々なレベルがあるが、本稿では個人レベルの中の間人間関係にその焦点を当てることにする。

ソーシャル・ネットワークは、個人の間人間関係の密度や構成の複雑さによって構成されている (Milroy, 1987)。ソーシャル・ネットワーク図には、人を表す「点」と、その点と点とをつなぐ「線」がある (図1)。例えば、図1のようにXという行為者がおり、4名と常に接触しているとする。その人が接触している4名を黒点で表し、それぞれの直線はそれぞれの人との結びつきを示す。図1のソーシャル・ネットワークは、行為者Xが4名同士と接触があり、4名同士もまたお互いに知っているという関係である。この意味で、Xが持つこのソーシャル・ネットワークは密度が高いことを示している。

しかし、一方で、これはソーシャル・ネットワークが閉じた状態であることも示している。つまり、Xを含む5名全員がお互いに知り合いであるという状況から、彼らは同じグループ内に属していると考えられる。そのため、他のグループとの接触がないという意味で、「閉じている」と捉える。したがって、この図1は、「密度の高い、閉じたソーシャル・ネットワークの構造」であると言える。

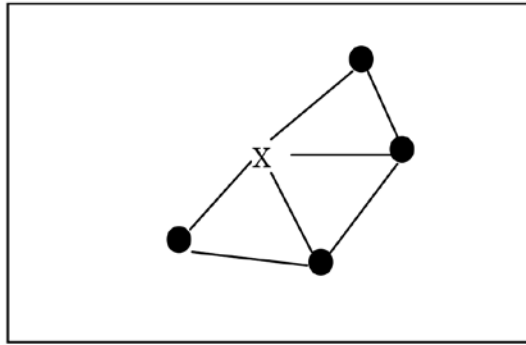


図1: 密度の高い、閉じたソーシャル・ネットワークの構造 (Milroy, 1987:20)

短期留学生の多くは、来日後、ほとんど知り合いのいない状態から、徐々に周りの人たちと接触し交流しながら、なんらかのコミュニティに所属し、ソーシャル・ネットワークを形成していく。この留学先でのソーシャル・ネットワークは、目標言語に接触する機会を左右する重要な影響要因として指摘されている (Isabelli-Garcia, 2006)。また、短期留学生にとって、ソーシャル・ネットワークは言語習得や文化理解などの学習面だけではなく、アイデンティティ構築や学習動機などの精神面においても影響を与えることが明らかになっている (Dewey, 2004, 2008; Fraser, 2002; Isabelli-Garcia, 2006; Stewart, 2010; Whitworth, 2006)。

しかし、そのような重要性にも関わらず、現実には日本人との接触が少ないと言う (佐藤, 2011)。なぜなら、留学生にとってホスト側とソーシャル・ネットワークを形成することはストレスの高いことだからである (田中, 2003; 横田, 1991; 八島, 2004 など)。その原因には、年齢や性別、日本語レベルや日本と彼らの出身文化圏との間にある「文化間距離」 (Furnham & Bochner, 1986) がある。具体的な「文化間距離」には、「日本人の表現の間接性」 (田中・藤原, 1992) という意思疎通の差や「日本人の集団志向・閉鎖的態度とそれに伴う対人関係」 (江村, 1993) という行動傾向などが含まれる。

そのため、留学生の多くは、同国人とのつながりが強いと指摘されている (Bochner, McLeod & Lin, 1977; Furnham & Alibhai, 1985)。Bochner, McLeod & Lin (1977) は「友人ネットワークの機能モデル」 (a functional model of friendship network) で、留学生が友人に求める機能は分化されていることを次のように説明している。第1のネットワークは、“mono-cultural networks” (単文化ネットワーク) と呼ばれ、同国から留学している者との間に形成され、自文化の価値観を共有したり文化的アイデンティティを維持したりする機能を持つ。第2のネットワークは、“bi-cultural networks” (二文化ネットワーク) と言われ、ホスト側との間に形成され、学習や留学に必要な諸手続きをスムーズに遂行する機能を持つ。第3のネットワークは “multi-cultural networks” (多文化ネットワーク) と呼ばれ、他国からの留学生との間に形成されるもので、レクリエーションを提供する機能を持つ。そして、これらのネットワークの中では、単文化ネットワークが最も強く形成され、二文化ネッ

トワークが最も弱いという。そのようなネットワークは、居住形態とも関わっている。大学寮と留学生会館とアパートの3つの居住形態の中では、寮が最も日本人学生との交流が多いこと、またアパートや留学生専用宿舎では同国人の友人が多いことがわかっている（横田・田中，1992）。

そうであるならば、大学寮を留学生と日本人学生のソーシャル・ネットワーク形成の場として活用すべきではないだろうか。そこで、留学生と日本人学生との間にソーシャル・ネットワークが形成されれば、留学生が日本語を使用する機会が増え、寮が日本語使用の実践の場と成り得るのではないだろうか。なぜなら、寮内の学びとは他者との関わりが前提となっているからである。ここでいう学びとは、学習者が語彙や文法といった知識を頭の中に体系的に蓄積するといった個人的な営みではなく、周囲との相互行為の中で動的に構築されるものである。つまり、短期留学生にとっての寮での学びとは、彼らが日本語を用いて寮というコミュニティに参加することにより、様々な人工物や他者に支えられて達成されるものだと考える。したがって、短期留学生が寮内で形成するソーシャル・ネットワークは、彼らの学びに影響を与え得ると言える。

3. 「相反する」大学寮の例

短期留学生が住む大学寮と一口に言っても様々なタイプがあるが、本稿では、東京にあるA大学の「短期留学生と日本人学生が住む大学寮」とB大学の「短期留学生が住む大学寮」の2つを例として取り上げる。この2つの大学寮の特徴について、筆者がこれまで実施した寮生への質問紙およびインタビュー調査、RAおよび事務へのインタビュー調査、建築学専門家との寮の視察に基づいて記述する。

なぜ、その二つの大学寮が「相反する」のか。それは、ハード面およびソフト面の様々な点において非常に異なるからである（表1）。以下、A大学とB大学に分け、それぞれ説明する。

まず、A大学の大学寮は、計12棟ありキャンパス内に点在している。これらの大学寮は、全て教育寮として位置付けられ、卒寮するまでにコミュニケーション能力やリーダーシップ、マネージメント力や問題解決能力が身につくとしている。また、この教育寮は、入寮生の選考から運営まで学生自らが行う「自治寮」となっている。そのため、各寮あるいは各フロアの定員数は、運営しやすいよう30名から40名となっており、寮生全員には月一回行われるミーティングへの参加義務や厳しいルールがある。また、掃除係や郵便物受け取り係といった役割分担もあり、当番制になっている。

寮に住む学生数は、留学生および日本人学生を合わせて約600人であり、学生全体の約20%を占める¹。どの寮も留学生よりも日本人学生の方が多い。居室は2名1室あるいは4名1ユニットとなっており、キッチンやバスルーム、スタディールームなど寮生全員で共有するスペースも設けられ、寮生同士の交流が促進されるよう、建築学的にも工夫されている。

¹ 2016年現在。

表1: A大学とB大学の短期留学生在が住む大学寮の比較

| | 比較項目 | 大学A (自治寮: 学生運営) | 大学B (非自治寮: 事務運営) |
|------|-------------|---|--|
| ハード面 | 寮の所在地 | キャンパス内 | キャンパス外 |
| | 寮数 | 12棟 (1~4階) | 1棟 (1~7階) |
| | 入寮時期 | 9月と4月 | 9月と4月 |
| | 寮費 | 約3~5万/月 | 約4万/月 |
| | 居住者数 | 各寮・各フロア30名~40名 | 約90名 |
| | 居室 | 2名1室・4名1ユニット | 1名1室・2名1ユニット |
| | 共有スペース | 寮生で共有: キッチン、リビングルーム、ダイニングルーム、スタディールーム、バスルーム、洗濯機など | 2名で共有: キッチン、ダイニングルーム、バスルーム、洗濯機 寮生で共有: イベントルーム |
| ソフト面 | 居住者 | 留学生 (短期・長期留学生) + 日本人学生 | 短期留学生 + 日本人 RA + 外国人教員 + 管理人夫妻 |
| | 入寮期間 | 短期留学生 10ヶ月 日本人学生・長期留学生 4年間 | 短期留学生 10ヶ月または4ヶ月 |
| | ルーム/ユニットメイト | 留学生と日本人学生 | 留学生同士 |
| | イベント活動 | 多数 月1回のミーティング・季節ごとのイベント/寮対抗サッカー試合/読書会/同窓会など | 月1回ベース ウェルカム・パーティー/クリスマス・パーティーなど季節ごとのイベント |
| | 活動レベル | 寮内・他寮棟・ | 寮内 |
| | 活動対象者 | 現寮生・卒寮生 | 現寮生とそのランゲージ・パートナー |
| | 共有ルール | 有り: 厳しい (例: ミーティング参加/門限/名前の呼び方/言語使用など) | 有り: 緩い (例: 友人・家族等の寮宿泊/掃除など) |
| | 役割分担 | 有り (例: 寮長/掃除係/訪問者対応係/郵便物受け取り係など) | 無し |

留学生には必ず日本人学生、日本人学生同士の場合は専攻や学年が異なる者同士がルームメイトあるいはユニットメイトとなり、お互いに学び合えるよう工夫されている。ルームメイトやユニットメイトは1年間固定ではなく、4月に一度部屋替えが行われる。このことにより、4月から入寮した寮生と9月からの寮生が交流できるよう配慮されている。ルームメイトのマッチングの際に使用するアンケートには、出身国・地域、専攻や趣味、性格などだけではなく、朝型なのか夜型なのかなど生活習慣に関する細かいことまで記入する。なぜなら、二人部屋の場合、仕切りもない部屋で一緒に生活しなければならないからである。その詳細なアンケートを行うことより、ルームメイト同士の問題を最小限に抑えつつ、寮生の多様性を活かす工夫がなされている。さらに、様々なレベルで交流を図るため、現寮生を対象にした寮内のイベント活動だけではなく、他寮との寮対抗サッカー試合や卒寮生との同窓会なども行われている。

このようにA大学の寮内では、短期留学生が長期留学生や日本人学生と統合されており、そこに明確な区別はない。つまり、短期留学生は、長期留学生や日本人学生と同様に「寮生」として共同生活を送り、活動に参加することが可能となっているのである。ただ、このような教育寮の「寮文化」に慣れるには、留学生だけではなく日本人学生にとっても時間のかかることである。そのため、入寮時には苦勞する寮生が多い。短期留学生の場合は、なおさらである。なぜなら、言語や文化の問題に加えて、入寮期間が「短い」からである。それにも拘わらず、短期留学生たちは困難を乗り越え、卒寮時には立派な「寮生」として成長していく。したがって、この大学寮は短期留学生をも巻き込んだ形で学生が主体となれるよう、ハード面およびソフト面において工夫されていると言える。そして、短期留学生にとって、この寮が何よりも大きな意味を持つのは、寮というコミュニティが日本語の実践の場となっているということである。この意味で、この大学寮は教育資源としての活用已成功している例だと言える。

一方、B大学の短期留学生が住む寮は1棟であり、キャンパス外にある。「自治寮」ではなく、運営は大学事務所が中心となって行われる。短期留学生は、原則として全員この大学寮に入ることになっている。短期留学生以外の居住者には、日本人学生のレジデント・アシスタント（以下、RA）3名、外国人教員数名、管理人夫妻がいる。居室は基本的に2名1ユニットであり、寝室などは別である。その2名で共有するのは、キッチンとダイニングルーム、バスルームなどである。寮生全員で共有するスペースはイベントルームのみである。各フロアに共有スペースはなく、廊下はコンクリートの壁で覆われている。そのため、この寮は、建築学的には閉鎖的で非常に交流が生まれにくく、課題点が多い。

寮内では、寮生同士の交流を促進するため、月1回の季節ごとのイベントがRAによって企画されている。そのイベントには、ウェルカム・パーティーやハロウィン・パーティー、クリスマス・パーティーなどが含まれる。寮生は、これらのイベントへの参加は任意である。短期留学生には日本人学生

のランゲージ・パートナーがおり、寮内のイベントには彼らも参加可能である。ルームメイトのマッチングの際には、彼らのバックグラウンドを考慮し、なるべく異なる国・地域同士の短期留学生在がルームメイトとなるよう事務所が行っている。ただ、A大学のような細かいアンケートは行われていない。それは、ルームメイトといっても寝室は別々になっており、また短期留學生同士だからである。マッチングされたルームメイト同士は、入寮時に部屋のルールをお互いに決めることになっている。このことにより、問題がなるべく起こらないような仕組みになっている。入寮期間は、9月から7月までの短期留學生は約10ヶ月間、4月から7月までの短期留學生は約3ヶ月間である。この大学寮の部屋替えは途中で行われない。そのため、寮内において10ヶ月間入寮する短期留學生と3ヶ月間入寮する短期留學生との間に多少の溝がある。また、欧米系の短期留學生とアジア系の短期留學生の間にも溝がある。これは、一緒に住めば交流が起こるわけではないことを示している。この点について、彼らが寮内で、入寮時期や出身国・地域によって偏ることなくソーシャル・ネットワークを形成するためには、ハード面およびソフト面においてまだまだ工夫が必要であろう。

この大学寮において、短期留學生と事務との橋渡しとして存在意義が大きいのがRAである。RAの主な仕事は、短期留學生が安心して生活できるよう日常的なサポートや、月一回の各居室の清掃チェック、寮内のイベント企画などである。大学寮の運営がスムーズに行くよう、RAと事務所とのミーティングが週1回定期的に行われ、そこでは短期留學生の様子や寮内イベントなどについて話し合われる。そのため、もし何か問題が発生した場合、即対応できるような体制になっている。RAのシステムは新しく、導入されてからまだ間もないが、RAが入ったことにより寮生の生活が安定しただけではなく活発になってきている。RAは事務所により選考される。この3名とも留学経験があり、英語でのコミュニケーションが可能で、留学先で自らがRAにお世話になった経験を持つ。その意味で、彼らは短期留學生の気持ちがわかっており、的確にサポートを行っている。ただ、RAの仕事は完全にボランティア活動になってしまっており、寮費免除もなく報酬も一切でない。この点については、今後検討すべきであろう。

この寮は、A大学とは異なり、RAが入っているものの、日本人学生とは別々の寮であることから、分離的な要素を色濃く残していると言わざるを得ない。A大学と比較すると、この大学の短期留學生は、寮内において言語・文化面など寮生活において「困難」なことが少ないため、良くも悪くも「居心地の良い場所」となっている。ただ、一般的に教育寮である寮生活とは、気の合う仲間がいつも一緒に行動し、何の束縛感も感じることなく、自由気ままに生活できるところではない。今後、教育寮として活用していくためには、ハード面およびソフト面において課題点は多い。このような課題点については、運営する側である事務所は認識しており、今後改善を行う予定である。特に、居住者については、短期留學生2名、日本人学生2名の4名で1ユニットとなり、一緒に生活できるよう変革していく予定であるという。

4. 寮内におけるソーシャル・ネットワーク形成と学びの特徴

短期留学生の寮内におけるソーシャル・ネットワークの大きな特徴は、図1(p.7)で示したような密度の高いソーシャル・ネットワークを形成していることである。ただ、ルームメイトからその家族や友達へというように派生するソーシャル・ネットワークが存在するため、必ずしも「閉じた」状態ではない。

本稿で「相反する」と位置付けたA大学の寮においてもB大学の寮においても、共通して言えることは、短期留学生にとって寮が「second home」となり、寮生が「家族」のような存在になっているということである。それは、なぜか。大学寮は、授業やクラブ活動といった一時的な交流の場であるコミュニティとは異なり、日常生活をベースとした連続的な交流の場であるコミュニティだからである。そのため、寮では他のコミュニティと比較し、密度の高いソーシャル・ネットワークが形成されるのである。

次に、具体的にA大学とB大学の寮のそれぞれのソーシャル・ネットワーク形成の特徴を寮生への質問紙およびインタビュー調査をもとに、ソーシャル・ネットワークの「参加者」、「形成時期」、「形成方法」、「学び」の4つの観点から論じる。

4.1. 参加者

当然ながら、寮の居住者によって、そこに形成されるソーシャル・ネットワークは異なる。つまり、A大学とB大学の寮では、どちらも密度の高いソーシャル・ネットワークが形成されていたものの、そのソーシャル・ネットワークへの参加者が異なっていた。

A大学では、留学生と日本人学生と一緒に住んでおり、日本人学生の方が多い。そのため、短期留学生は、留学生同士よりも日本人学生とのソーシャル・ネットワークを広く形成していた。そして、その多くの日本人学生は、留学経験があり、日本語だけではなく英語でのコミュニケーションもほぼ可能であった。先行研究では、留学生と日本人学生のソーシャル・ネットワークは困難であると言われてきたが、A大学の寮内では形成過程において紆余曲折はあるものの、短期留学生と日本人学生の間に密度の高いソーシャル・ネットワークが形成されていた。

一方、ほぼ短期留学生だけが住んでいるB大学の寮では、短期留学生同士のソーシャル・ネットワークが大部分を占め、非常に密度が高い。それに対して、日本人参加者は、RAの3名と管理人夫妻の2名の計5名のみであった。短期留学生同士のソーシャル・ネットワークの密度が非常に高い理由には、寮で時間を共有しているということ以外に、寮以外でも一緒に時間を過ごしていることが挙げられる。例えば、日本語クラスでも一緒、週末の文化イベントでも一緒、というように同じメンバーの短期留学生同士の共有時間が長い。その短期留学生同士のネットワークの中でも、同国から留学している者同士とのネットワークが最も強く、次に他国からの留学生との間に強く形成されていた。これ

は、Bochner, Mcleod & Lin (1977)の“mono-cultural networks”が最も強く、次に“multicultural networks”が強いという「友人ネットワークの機能モデル」と一致する。ただ、その中でも欧米系とアジア系の留学生の間には、ソーシャル・ネットワークがほとんど形成されていなかった。その背景には、言語・文化の違いや共有時間の少なさなどがある。このことから、この状態で仮に日本人学生と一緒に住んだとしても、短期留学生と日本人学生との間にソーシャル・ネットワークを形成することは難しいと推測する。ただ、短期留学生の中でも、日本語である程度コミュニケーションが可能な学生は、日本語習得および日本文化理解の面から日本人学生のルームメイトを持つことを強く望んでいた。彼らの間にソーシャル・ネットワークを形成するためには、一緒に住めば良いという簡単なことではなく、ハード面およびソフト面において工夫が必要であることは明らかである。

4.2. 形成時期

A大学もB大学も短期留学生の寮内のソーシャル・ネットワークは、9月と4月の大きく2回でほぼ形成されていた。これは、入寮時期と一致している。この時期にソーシャル・ネットワークが形成される仕掛けには、入寮時期に合わせてウェルカム・パーティーなどのイベントが開催されていることが挙げられる。つまり、そのようなイベント活動がソーシャル・ネットワーク形成のきっかけとなっている。また、短期留学生は、入寮したばかりの頃に、できるだけ多くの人と知り合い、友人になりたいという強い気持ちを持っている。そのため、9月と4月に最も形成されやすいのである。

A大学では、多くの短期留学生は9月に入寮する。しかし、日本人学生の場合、9月あるいは4月に入寮してくる。そのため、すでに9月に入寮している短期留学生にとって、4月から入寮してくる日本人学生は「後輩」に当たる。そのため、短期留学生は「先輩」として、この4月に入寮する日本人学生と新たなソーシャル・ネットワークを形成していた。また、4月には新しく寮生が入ってくるため、部屋替えが行われる。この部屋替えが、9月生と4月生の間に接触を生み出し、新たなソーシャル・ネットワーク形成のきっかけとなっている。一方、B大学では、A大学とは異なり、部屋替えが行われない。そのため、9月生と4月生の間の接触は限られており、それほど密度の高いソーシャル・ネットワークは形成されていなかった。このことから、入寮時期の異なる短期留学生同士の交流を図るためには、部屋替えを行う必要が示唆される。

寮内でのソーシャル・ネットワーク形成の時期は、キャンパス・カレンダーおよび短期留学生の動機と密接な関わりがあり、それをチャンスとして有効に活用できるかどうかは、寮の運営にかかっていると言える。

4.3. 形成方法

短期留学生は、寮内での共有スペースやイベント活動、SNSなどを通してソーシャル・ネットワー

クを形成していた。例えば、A大学では二人部屋の場合、日本人のルームメイトと仕切りのない6畳一間で一緒に生活する。そのため、いやでもコミュニケーションをとらざるを得ない環境に置かれる。また、寮内の共有スペースには、居室やキッチン、バスルームなどが含まれるが、ルームメイト以外の寮生とは、そのような共有スペースを通じてソーシャル・ネットワークが広がっていた。例えば、キッチンには、ほぼ同じ時間帯にほぼ同じ寮生が集まる。短期留学生は、日本人学生が作っているものに興味を示し会話を始めたり、作り方や調理器具の名前を日本語で教えてもらったり、あるいは自分の国の料理を教えてあげたりしていた。このことから、キッチンはソーシャル・ネットワーク形成の重要なきっかけとなっていることがわかる。

一方、B大学は、A大学とは異なり、共有スペースは居室かイベントルームのみである。そのため、それらの共有スペースを通じてソーシャル・ネットワークが形成されるのは、ルームメイトが中心である。イベントルームは、月に一回主に季節ごとのイベントのために利用されるが、そこで新しい寮生と知り合うというのは入寮当初だけである。このように共有スペースがないため、この寮ではFacebookがコミュニケーション・ツールとして利用されている。例えば、RAが主催するイベント以外に、短期留学生が週末のパーティーやハイキングなどを企画し、その詳細情報をFacebookで流す。このことにより、寮内の活動が全員に共有され、あまり会ったことのない寮生同士がメッセージを通して「会話」をし、そのパーティーやハイキングという活動に参加することで、ソーシャル・ネットワークが形成されていた。このように、建築学的に共有スペースが少ない場合は交流が起こりにくいですが、SNSを利用することでお互いに知り合うきっかけにはなるだろう。ただ、SNSが共有スペースの代替案になるわけではない。

4.4. 学び

寮における学びの特徴は、そこに住む寮生とのソーシャル・ネットワークが前提となっており、寮への参加過程に埋め込まれていることである。つまり、経験と学びが分離しておらず、経験の中に学びが埋め込まれているということである。A大学とB大学の寮における短期留学生の学びには、「他文化理解」や「生活の自立・自己管理」、「対人関係への気づき」や「コミュニケーション能力の向上」など共通するものがある。

しかし、明確な違いが出た学びに「日本語の向上」と「日本文化理解」があった。A大学の寮に住む短期留学生は、日本人学生に囲まれた中で共同生活を送っているため、「教室で学べない」スラングや方言、寮用語や「多様な表現方法」といった日本語を獲得していた。そのため、どの短期留学生も卒業時には、「日本人と一緒に生活したことで自分の日本語が向上した」と感じていた。また、日本文化に対する理解も深まっていた。

一方、B大学の寮では、ほぼ短期留学生しか住んでいないため、寮内における「日本語の向上」と

「日本文化理解」いう学びは得られなかった。寮内での主な使用言語は英語であった。もちろん、全く日本語を使用していないわけではなく、RAと日本語で挨拶をしたり、短期留学生同士でも日本語で会話をしたりすることもある。しかし、それは日本語の学びにはつながっていなかった。なぜなら、彼らは、RA以外の日本人学生と共同生活を送っていないため、必ずしも日本語を使用して寮というコミュニティに参加しなくてもよかったからである。彼らにとっての一番大きな学びは、様々な国や地域から集まる短期留学生を通して、彼らの文化について理解を深めたことであった。

このことから、短期留学生が寮内で誰とソーシャル・ネットワークを形成するかによって、彼らの学びが変わってくるのがわかる。

5. 教育資源としての寮の活用のために

寮は、居住者同士が寝食を共にするため、非常に密度の高いソーシャル・ネットワークを形成することが可能な場である。特に、短期留学生にとって日本人学生と一緒に住む寮は、彼らとソーシャル・ネットワークを形成し、日本語の習得や文化理解、日本語を通じた学びまで多様な学びを育む教育の場と成り得る。ここに短期留学生にとっての大学寮の価値があると考えられる。このことから、短期留学生が日本人学生と同じ寮に住めるようにし、その寮というコミュニティに日本語を通して参加できるよう、つまり、日本語使用の実践の場として活用できるようハード面およびソフト面において工夫すべきだと考える。では、具体的に教育資源としてどのように活用すべきか。

まず、入寮前には慎重なマッチングが必要になってくる。短期留学生とルームメイトやユニットメイトになる日本人学生の選考には、考慮すべき点が多い。なぜなら、短期留学生の場合、出身国・地域が多様であり、また日本語を全く学習せずに来日することもある。そのため、文化・言語面での困難が予想される。さらに、彼らは留学期間が10ヶ月や3ヶ月と「短い」。そのため、その限られた時間の中で、いかにして日本人学生と密度の高いソーシャル・ネットワークを形成し、日本語の学びあるいは日本語を通じた学びを獲得するかは、彼らを取り囲む寮生の存在が大きい。特に、日本語を全く学習せずに来日した短期留学生にとっては、最初から日本人学生をルームメイトに持つことに抵抗があることが筆者の調査でわかっている。それは、言語面と文化面において不安があるからである。その場合、ルームメイトとなる日本人学生には留学経験があり、短期留学生の気持ちが分かり、英語あるいはその短期留学生の使用可能な言語でコミュニケーションが行えることが望ましい。

また、そのような基本的なバックグラウンド以外にも、入寮理由や時間、光、音、におい、清潔さなどの生活習慣などの情報も重要になってくる。表2は、短期留学生と日本人学生とのマッチングの際に使用するアンケート用紙の質問項目案である。

表 2: マッチング・アンケートの質問項目案

1. 基本的なバックグラウンド

専攻／学年／年齢／性別／出身国・地域／使用言語とそのレベル・学習言語とそのレベル

旅行以外の海外在住経験・国・期間／趣味

2. 入寮時にあたって

入寮理由／入寮期間／ルームメイトの希望（日本人学生・留学生）とその理由

3. 生活習慣について

時間（例：平日の起床時間と就寝時間は何時か）

光（例：就寝時に電気を消すか）

音（例：音楽を聴きながら勉強するか）

におい（例：相手の食べている物やつけている香水のにおいが気になる方か）

清潔さ（例：洗濯や部屋の掃除は一週間に何回するか）

生活習慣については、寮室が別々の場合、ここまで細かく聞く必要はないと思われるが、一つの部屋を共有する場合は、表 2 のような詳細を聞いた上で、慎重に行うべきである。このようなアンケートを行い、マッチングすることで事前に問題を最小限に抑えることができると考える。

入寮前に、寮生の選抜が行われ、念入りなルームメイトあるいはユニットメイトのマッチングが行われたら、次に入寮中についてである。入寮中に短期留学生と日本人学生が濃いソーシャル・ネットワークを形成するためには、A 大学および B 大学の寮の例から「共有活動」、「共有スペース・SNS」、「共有ルール」の 3 つの要素が必要であると考えられる。

「共有活動」とは、寮内における日々の生活やイベントといった活動を共にすることである。この活動によって、連続的に短期留学生と日本人学生が接触し、交流を深めることができる。そして、それは「共有スペース・SNS」と関連している。寮生同士が一緒に使うことができる物理的な空間が設置されることにより、出会いが生まれ、交流が起こり、ソーシャル・ネットワーク形成へとつながる。しかし、寮によっては B 大学のように共有スペースがあまりない寮もあるだろう。その場合は、facebook などの SNS がコミュニケーション・ツールとして役に立つ。もちろん、SNS が共有スペースの代わりになるわけではないが、少なくともそれを補う役割は果たせるのではないか。また、「共有スペース・SNS」を利用する場合、そこには「共有ルール」も必要になってくる。その「共有ルール」には、寮全体の危機管理に関わるルールから共有スペースごとの細かいルールまでが含まれる。例えば、寮全体としては、門限やゴミの分別、禁煙などのルールなどがある。共有スペースごとには、例えば、キッチンを入寮生全員が気持ちよく利用するためのその使い方のルールが必要である。また、言語についてもルールが必要であろう。A 大学では、留学生も日本人学生も「寮生」として主体的に寮の活動に参

加できるよう、ミーティングや寮内の掲示板の情報には日英両言語使用というルールがある。このことにより、「留学生だから」といった言い訳はできず、全員が「寮生」として対等な関係を構築するに至っていた。短期留学生と日本人学生の間には、これら3つの要素が調和されることにより、双方の間に密度の高いソーシャル・ネットワークが形成されると考える。そして、そのようなソーシャル・ネットワークが形成されるならば、そこに日本語習得や文化理解なども含め多様な経験的学びが生起するのである。

そして、寮生活の中での多様な経験的学びを獲得した寮生との間には絆が生まれ、それは卒業後も続く。そこで必要になってくるのが同窓会やe-letterなどによる卒業後のソーシャル・ネットワーク形成の維持・拡大である。A大学では、各寮において同窓会が開かれる。そのため、現寮生と卒業生との間にもソーシャル・ネットワークが形成される。つまり、寮内で形成されたソーシャル・ネットワークは卒業後も継続され、またそれが世代を超えて拡大されるものとなっていくのである。

以上の寮を教育資源として活用するための考察を図2のようにまとめた。入寮前、在寮中、卒業後と3つの時間軸で考える。

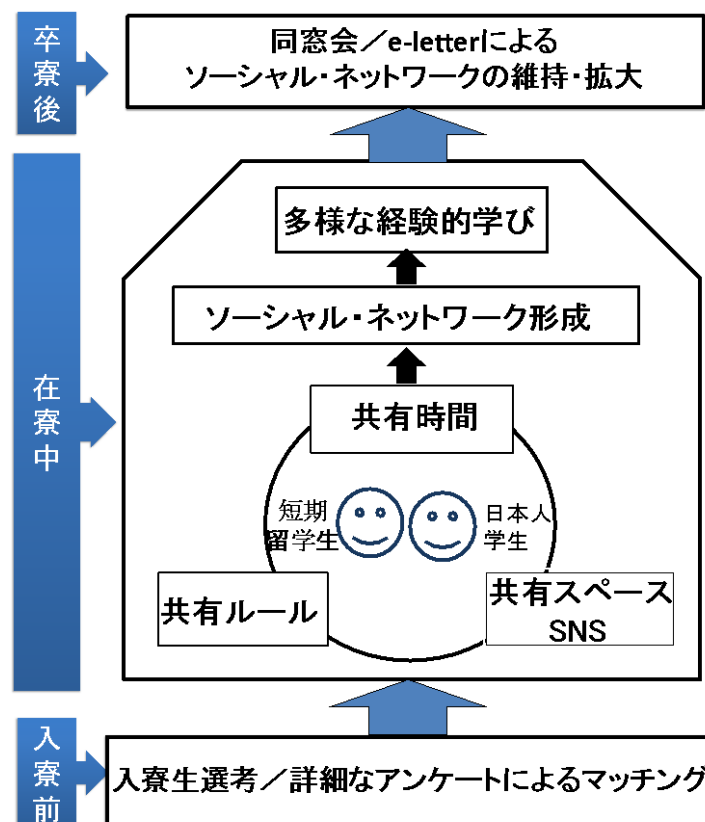


図2: 教育資源としての大学寮の活用のために

入寮前には、入寮生選考および詳細なアンケートによるマッチングが必要である。在寮中には、「共有活動」、「共有スペース・SNS」、「共有ルール」の3つの要素が調和することで、対等な関係となり短

期留学生と日本人学生との間に密度の高いソーシャル・ネットワークが形成される。そして、そこで短期留学生が日本人学生および長期留学生と同等に扱われることで、彼らのソーシャル・ネットワークが広がり、それが日本語習得を含む多様な経験的学びへとつながっていく。さらに、卒業後には、その寮内で形成されたソーシャル・ネットワークは同窓会やe-letterなどを通して、維持・拡大していく。

短期留学生と日本人学生と一緒に住む大学寮は、教育的資源として非常に期待できる環境でありながら、細部にまで注意を払わなければ問題が即起きる環境でもある。それは、いわばコインの表と裏のようなものである。従来のように、短期留学生を日本語授業で困い、日本人学生や長期留学生とは別に大学の片隅で「お客様扱い」をすることは、大学側にとっては「扱いやすい」であろう。そして、短期留学生にとってはそれが「居心地のよい場所」となるのかもしれない。B大学の短期留学生の一人は、「寮生活に満足しています。とても便利だし、楽しいし、みんなと仲良くなれたし。でも、寮の中でみんなと一緒に英語で話していると、自分が日本にいるっていうことを忘れちゃうんです」と語った。大学寮を教育資源として活用する以上、短期留学生側の満足のみに応えるような迎合的なものにならぬよう留意する必要がある。彼らの大学寮におけるソーシャル・ネットワークを変化させることができるのは、その大学寮のあり方であり、大学側なのである。

6. おわりに

短期留学生は、留学中、教室の内外を問わず、様々な人と出会い、文化的・社会的経験をしながら多くのことを学んでいる。日本人学生と一緒に住む大学寮は、その学びの場の一つとして大きな可能性を持っている。短期留学生にとって日本での留学経験は、その時の文化理解や世界観だけでなく、その後の就職活動および個人の成長と価値観にも影響を及ぼす。つまり、短期留学は留学している期間は「短期」であるものの、個人の人生においては「長期」的な影響を及ぼすのである。

筆者は、アメリカにおいて最初に創設されと言われるニューヨーク市のインターナショナル・ハウスをはじめ、様々なタイプの寮に住んできた。その中での人々との出会いと彼らを通じた経験的学びは、その後の人生において影響を与えてきた。短期留学生にとって、日本人学生と一緒に住む寮生活の経験的学びがより有意義な留学生活へとつながることを期待する。

参考文献

Bochner, S., McLeod, B., & Lin, A (1977). Friendship patterns of overseas students: A functional model. *International Journal of Psychology*, 12(4), Psychology Press, 277-294.

- Christakis, N., & Fowler, J. (2009). *Connected: The surprising power of our social networks and how they shape our lives*. New York: Little, Brown and Company.
- Dewey, D. (2004). A comparison of reading development by learners of Japanese in intensive domestic immersion and study abroad contexts. *Studies in Second Language Acquisition*, 26, 303-327.
- Dewey, D. (2008). Japanese vocabulary acquisition by learners in three contexts. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, 15, 127-148.
- Fraser, C. (2002). Study abroad: An attempt to measure the gains. *German as a Foreign Language Journal*, 1, 45-65.
- Furnham, A., & Alibhai, N. (1985). The friendship networks of foreign students: A replication and extension of the functional model. *International Journal of Psychology*, 20, 709-722.
- Furnham, A., & Bochner, S. (1986). *Culture shock: Psychological reactions to unfamiliar environments*. London: Methuen.
- Hendrickson, B., Rosen, D., & Anue, K. (2011). An analysis of friendship network, social connectedness, homesickness, and satisfaction levels of international students. *International Journal of Intercultural Relations*, 35 (3), 281-295.
- Isabelli-Garcia, C. (2006). Study abroad social networks, motivation and attitudes: Implications for second language acquisition. In M. Dufon and E. Churchill (eds), *Language learners in study abroad contexts* (pp. 213-258). Clevedon, UK: Multilingual Matters Ltd.
- Kudo, K. (2010). Intercultural friendship competence: Research prospects and future directories. *Dokkyo University Studies in English*, 27-43.
- Milroy, L. (1987). *Observing and analyzing natural language*. New York: Basil Blackwell Inc.
- Stewart, A. (2010). Using e-journal to assess students' language awareness and social identity during study abroad. *Foreign Language Annuals*, 43 (1), 138-159.
- Vande Berg, M., Connor-Linton, J., & Paige, R. (2009). The Georgetown Consortium Study: Intervening in student learning abroad. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, XVIII, 1-75.
- Van Laar, C., Levin, S., Sindair, S., & Sedanius, J. (2005). The effect of university roommate contact on ethnic attitudes and behavior. *Journal of Experimental Social Psychology*, 41 (4), 329-345.
- Whitworth, K. F. (2006). *Access to learning during study abroad: The roles of identity and subject positioning*. Dissertation. The Pennsylvania State University.

- 江村裕文(1993)「留学生の異文化適応」『法政大学教養学部紀要』5, 4-20
- 佐藤由利子(2011)「日本への短期留学のニーズと課題に関する考察から：短期留学生調査回答の地域別、機関別、課程別分析から」『留学生教育』16, 13-24
- 高井次郎(1994)「日本人との交流と在日留学生の異文化適応」『異文化間教育』8, 106-116.
- 田中共子(2003)「日本人学生と留学生の対人関係形成の困難に関する原因認知の比較」『学生相談研究』24, 41-51.
- 田中共子・藤原武弘(1992)「在日留学生の対人行動上の困難：異文化適応を促進するための日本のソーシャル・スキルの検討」『社会心理学研究』7(2), 92-101.
- 独立行政法人日本学生支援機構(2014)「学生生活に関する施設の設置状況」
http://www.jasso.go.jp/about/statistics/torikumi_chosa/_icsFiles/afieldfile/2015/12/08/h25torikumi_chousa.pdf (2016年7月12日閲覧)
- 牧田綾子(2013)「グローバル人材育成の場としての『国際寮』」『カレッジマネジメント 183号』リクルート進学総研. http://souken.shingakunet.com/college_m/2013/11/18314-8f34.html (2014年2月12日閲覧)
- 正宗鈴香(2015)「寮生活における留学生の異文化社会適応、人格形成、言語習得に関する事例研究：国際寮の教育的機能の可能性」『麗澤大学紀要』98, 63-72.
- 望月由起(2013)「人材育成のしくみとして学生寮の活用」Between, 8-9月号.
http://www.shinken-ad.co.jp/between/backnumber/pdf/2013_08_tokubetsu00.pdf
(2016年7月12日閲覧)
- 八島智子(2004)『第二言語コミュニケーションと異文化適応：国際的対人関係の構築をめざして』多賀出版.
- 横田雅弘(1991)「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」『異文化間教育』5, 81-97.
- 横田雅弘・田中共子(1992)「在日留学生のフレンドシップ・ネットワーク：居住形態(留学生会館・寮・アパート)による比較」『学生相談研究』13(1), 1-8.